北海道医師会役員退任ご挨拶

広報14年間を顧みて

前常任理事
西　信博

1989年4月から道医常任理事として、広報部、医政部、看護対策部、病院部などの仕事をして14年になった。この度任期満了をもって退任した。

メインの広報部の仕事では、毎月2回発行される北海道医報の第695号から第1014号までの編集を任された。事務局の助けを得て編集の実務を行った。これまでの広報部長は裏表紙のコラム「内視鏡」をホームページのように、個性的な意見を書いてきた。私も同様に「医療時事問題」や「医療の傾向と対策」をテーマに、いろいろ勝手なことを書き続けて、309回に及んだ。

医師を相手のコラムだけに、うっかりしたことは書けない。月2回の締切に追われて、データの収集に苦労したが、多くの雑学知識を得た。

このコラムには多くの道医会員から好意ある反響をいただき、北海道中に名前が売れた。医師の家族、医療関係者、医療機関や他の団体、北海道以外にも興味をもたれる読者がいて、他の都府県の会報などに引用・転載されたことも多い。

任期の間に「山のあなたの空遠く」「山のあなたの空遠く・Ⅱ」と題する、2冊の私家版の随筆集を出版できたのも北海道医報のおかげである。

この北海道医報が、今年4月より毎月1回の発行になるのはさびしい。

道医広報のほかに、日本医師会の広報委員を務めた。毎月2回の日医ニュースの編集委員会では記事やコラムが割り当てられる。多くは東京日帰りであったが、各地へたびたび出張・取材した。

ことに日本医学会総会は、京都、名古屋、東京、福岡と4回出席して貴重な経験を得た。この長い任期の間に日本医師会長は、羽田、村瀬、坪井と代わり、担当常任理事は木村、杉浦、本吉、山田、雪下と代わった。

全国各ブロックからの広報委員の間で、各地の医療事情を反映した議論も活発である。

看護対策部ではマスコミの「お礼奉公」を強調した准看問題キャンペーンと戦い、看護者の不足と准看養成所の縮小・廃止問題に悩んだ。また准看知事試験問題作りに、多くの委員と議論しながら、深更に及んだこともたびたびであった。

かっての道医の会合には、酒がつきものと聞いていた。覚悟をして出かけたが、現在の北海道医師会はまことに紳士の集まりで、羽目を外すことはあまりない。もっとも毎日のように続く会務のたびに、飲んでいたら身体がもたない。

名所・ススキノへ通う機会も少なかった。夜の札幌通いを続けながら、ツケの利く店を一軒も開拓できなかったのは、まことに残念であった。

私は学生、インターン、医局時代の12年間小樽から、早朝、深夜の汽車通いをしていた。しかし老境へ入った身には、診療を早じまいして夜の札幌へ通う医師会生活は、疲労がたまってきた。

長い間の北海道医師会役員としての活動を支えてくれた、北海道医師会会員、北海道医師会職員、さらに私の家族に心から感謝する。

役員退任ご挨拶

前常任理事
今井　利賢

常任理事を退任するに当たり、道医会員の皆様にご挨拶申し上げます。

開業３年目の昭和54年、札幌市医師会西支部の幹事を振り出しに私の医師会活動が始まりました。以後、札幌市医師会理事６年、北海道医師会常任理事６年をもって、私の24年間の医師会活動に一応の区切りをつけさせていただくことにいたしました。

現役の外科医が医師会活動を敬遠する際の免罪符として､｢急患が来たから｣､｢臨時手術だから｣、「手術が長びいているから」などとし、一方敬遠すればするほど医師会は遠くなってゆくものでありますが、若い医師、特に外科医が声をあげなければ、優秀で狡猾な官僚の言いなりになってしまうとの私なりの危機感から活動を続けて参りました。

末梢血管疾患の外科治療を生涯のメインテーマとし、また、一方で地域に密着した医療も提供する２本の柱で、小さいながらも病院を運営しながらの医師会活動は、固定医・応援医の確保、パラメディカルスタッフの確保・育成に苦労と費用をかけ、また、職員の理解を得ながら、何足もの草鞋を履いて来たように思います。

官僚のみならず内閣府とも闘わねばならない現在の厳しい医療界の状況を考える時、多くの方々から慰留もされ、お叱かりを受けたにも拘らず退任いたしましたことは、あるいは敵前逃亡の、もしくはボランティア大学中退の謗りを免れないかとも考えますが、私自身の人生設計のこと、後進に道をゆずって若干でも若返りをはかり道医のさらなる活性化につなげたいこと、妻の病気のこと、新しい時代に対応した本業の展開に今後の余力を費やしたいことなど、全く個人的な理由によるものであることを飯塚会長にお話してご了解をいただきました。

道医の常任理事のはじめの４年間は財務部長を仰せつかりました。途端に拓銀の破綻に遭遇し、驚愕と心痛は大変なものでありましたが、何とか１円の損失もなく道医会員の皆様にご迷惑をかけることなく乗り切ることができたことは一生忘れることのない事件でありました。これを機会に道医の会計基準等の改正、各積立金の個別管理、特別会計の整理統合、役員退任慰労金規程の見直し、経費の節減と各会計の透明性の確保に精一杯努力した思いがあります。あとの２年間は総務部長を務めさせていただきましたが、厖大な道医の諸事業と各郡市医師会からの要請・要望に応えるべく、その調整に腐心したというのが実感であります。幸い、吉田前会長、飯塚現会長の強力なリーダーシップのもとで、執行部内での意志統一が万全に図られていたために大過なく務めることができました。

この間多くの先生方と出会い、大変勉強させていただきました。また、会長はじめ各役員・会員の先生方には大変お世話になり、まことに有難く感謝の言葉もありません。そして、業務を支え、準備を遺漏なく整えて下さった河村局長はじめ道医の優秀な職員の皆様方にも深くお礼申し上げます。まことに有難うございました。

役員退任のご挨拶

前常任理事
並木　昭義

北海道医師会の常任理事として2期4年間を無事に務めることができました。この間は大学や学会での活動と違った貴重な経験、多くの勉強をさせていただきました。これには飯塚会長はじめ役員の方々のご配慮とご支援、そして事務職員の皆さんの親身なご協力によるものであり、心から感謝致します。私が医師会活動に入った切っ掛けは、日本麻酔科学会の役員として中央官庁、政党などに陳情に行った際に、必ず日本医師会との関係を聞かれ、その存在の大きさに感心し、その内部に入って活動することが学会のためにも重要であると考えたからです。今回の卒後臨床研修におきましても、コア診療科として内科、外科、救急でしたが日本医師会の働きかけにより、救急に麻酔を含むという内容になりました。私自身北海道医師会の活動を通して医療の実態を知ることができ、また医療経営につきましても学び、そして当大学を外から客観的に見ることができました。昨年附属病院長に就任しましたが、医師会で得た情報、知識を大いに活用し、できる限りの改善改革を行いました。その結果、病院の雰囲気にも変化が見られ、診療収入も前年度を上回るという喜ばしい結果を生むことができました。当大学附属病院は、高度救命救急センターが来年以降に発足するメディカルコントロールの北海道を統括する基幹施設、また、リハビリテーション部門は4月から北海道地域リハビリテーション支援センターになります。これらのことは、北海道医師会の担当理事の力強い支援によるものです。私は産業保健部長をしていたお陰で、産業医の資格を持つことができました。大学が法人化された場合産業医が必要になりますので、有難く思っております。私はこれから札幌医大医師会長として、医師会活動に加わっていくことになります。医師会活動が活発になるにはやはりマンパワーが必要であり、特に若い医師たちに多く加入してもらうことです。そのためには若い医師たちに医師会活動の実情をよく知ってもらうこと、入会する利点を明示すること、そして医師会に対する信頼感を持たせることが大切です。しかし今回の名義貸し、借りの問題は彼らに大学の医局、当局だけでなく、病院、さらに医師会に対して不信感を持たせたようであり気掛かりです。この回復には大学自体は当然ですが、病院側、医師会側も真摯に受け止め、適正に対応していくことが大切です。今、大学は大学院の充実化を図っており、大学院生を多く入学させています。彼らは授業料を払い、しかも家庭を持った者も多く、その生活保障が十分でない状況下で研究をしています。差し迫っているのは健康保険の問題です。医師国保は自家診療を受けられず、国保より若干高くつくので、国保に入らざるを得ない学生が結構おります。この点の改善を早急にお願い致します。それは彼らが将来北海道医師会を背負う人材であり、1つの投資になるからです。もう1つの大切な問題は、女性医師を多く加入させることです。毎年医師国家試験に3割強の女性が合格します。しかしその待遇、特に結婚、子育ての場合には悪い条件下に置かれます。そのため優秀な女性が医学、医療界では活かされておりません。女性患者の多くは女性医師の診察を希望しています。当大学附属病院では4月から女性専門外来を設置します。また当大学医師会には女性医師部門を発足させます。この問題も北海道医師会の重要な活動の1つとして、是非取り上げることを要望します。これまでのお礼とこれらのお願いを述べ、退任のご挨拶とさせていただきます。

役員退任ご挨拶

前常任理事
小柳　知彦

2期4年間務めさせていただいた常任理事も無事終えることができるのは何よりです。

医育機関のなかば指定席的な役職で、役割も従来どおり学術を担当させていただきました。

日本医師会生涯教育推進委員会の一人として教育カリキュラム改訂、はがき解答、インターネット等による新しい学習方略の推進、リカレント教育を導入したことなどが思い出されます。

殊に、最後の点に関しては道医が長年に亘って取り組んできた論議と実地を組み合わせた生涯教育システムが、日医での連絡協議会での事例報告をきっかけに評価され導入された経緯があるだけに嬉しい限りでした。

北海道医学大会を定款の改正を踏まえて正式に道医師会の学術大会としました。幹事校はこれまで通り三大学のもち廻り制という点は変わりありませんが、こうすることで日本医師会における日本医学会同様道医の学術団体としての性格をより明らかとすることができたものと思います。

またIT化の著しい時代の変化に呼応して医学大会への参加申し込み、演題抄録などオンライン化も進め本年度は分化会ほぼ全てで、オンライン登録が採用されるのは何よりです。

医師会活動のイの字も分からず参加させていただいた者ですが、他の役員の方々の親切と事務の方々の全面的な協力のお蔭で、この4年間楽しく過ごさせていただきました。

貴重な経験をさせていただいた皆さんに感謝して退任のあいさつとします。どうもありがとうございました。

理事退任に当たって

前理事
島田　保久

北海道医師会理事の退任にあたり、ご挨拶の機会を与えて下さりありがとうございます。

平成11年（1999）4月から2期4年間という短い期間ではありましたが、役員、事務局の皆様のご理解とご協力をいただきまして、任期をまっとうすることができました。心から御礼申し上げます。

北海道医師会とのかかわりあいは、理事になる前からありました。道医の「定款等検討委員会」「会費負担金等検討委員会」「社保対処費検討委員会」の委員として会員の意見をふまえながら活動しておりました。平成6年（1994）1月には「定款等検討委員会」の委員長として各ブロックの意見をまとめ、諮問書に答申、平成8年（1996）2月には「会費等検討委員会」の委員長として諮問書に答申しました。この答申書によって社保対処費の負担金徴収が平成7年度をもって廃止することを確認しました。

しかし何といっても強い印象に残っているのは武見敬三参議院議員の選挙でした。医師会系の票がはっきり出る選挙であり、道医連の副委員長として、札医連の委員長としてどう戦うか、道医連と協力しながら真剣に行動しました。医療関係団体との連携がとくに重要なことで、沢田　守柔整師連盟委員長、伊藤公一鍼灸師連盟委員長とは密接に打ち合わせをしながら票の拡大をはかり、札医連の各支部役員会にも長瀬道医連副委員長とお願いして歩きました。その結果はご存知の通りです。くやしいでした。残念でした。全国区で最多得票をとったある議員から、医師会の集票力はしれたものだとの発言があり、くやしさで一時的にショックを受けましたが、事実は事実として受けとめ、こちらからの政治活動の方法を考えようと前

向きに考えようと思いました。

医療制度改悪ということで日本医師連盟で全国医師総決起大会が東京で開かれ、わたくしは全国の郡市医師連盟を代表して演説をしました。日医連の行動は正しいとは思いますが、地方から盛りあがった結果なのかどうか、気になりました。

日本医師会代議員会でも北海道を代表して質問をしました。身びいきする気は全くありませんが、青柳日医副会長と一部役員以外の答弁は形式に流れたもので、心が入っていないと思っています。

これからの医療情勢は一段ときびしく、地域医療の崩壊につながる政策を小泉内閣はしようとしています。市民とともにどこまで戦っていけるのか、その前に会員が一致団結できるのか、不安を感じます。飯塚会長をはじめ道医の力量が問われます。今後のご活躍を期待しております。

この４年間本当にありがとうございました。

理事退任ご挨拶

前理事
高橋　昭三

小樽市医師会会長を辞することに伴って、３月末をもって北海道医師会理事の職を退任することになりました。平成７年４月に就任して以来４期８年という長きに亘り務めさせていただいたわけでありますが、この間、北海道医師会のための、さしたる貢献をすることもなく、ただ己の席を温めていたにすぎなかったという想いが、正直なところ今の感想であります。しかし、前道医会長でありました故吉田信先生、現道医会長であります飯塚弘志先生をはじめ、多くの道医の役員諸先生には、親しくお話をさせていただき、様々な教示を受けながら地元小樽市医師会会務運営の上での参考となる助言をいただきましたことについては、この誌面をお借りしてお礼を申し上げますと共に、大変ありがたく、嬉しく、今になって懐かしい想いが募っているところです。

今、理事を退任するにあたり、２～３の感想を述べさせていただきたいと思います。まず、飯塚会長の若々しい精気溢れるすぐれたリーダーシップ、そして北海道医師会会員のオピニオンリーダーとしての識見に親しく接することのできましたことは、何より幸せなことでありました。地元医師会、ブロック医師会のいろいろな問題点を浮彫りにされ、反省することしきりでありました。地元医師会の運営、会務執行について大過なく過ごせましたのは、飯塚会長のすぐれたリードによるものと感謝しております。

もう一つは、日本医師会坪井会長のことであります。北海道医師会理事就任と同時に日本医師会代議員となり、年２回の代議員会に出席いたしましたが、坪井会長２期目の会長就任の祝賀会での挨拶で、決して誇り昂ることなく、静かな口調で「私はこれからの任期２年間、医の倫理の高揚と、生涯学習制度の堅持を２本柱として、会の運営にあたってまいります」との言葉が、今も私の耳に残っております。この言葉は、今までもそうでありましたが、今後益々大切なもの、しっかりと守り抜かなければならないもの、医師である者はみなこの言葉を強く吟味し、かみしめていかなければならないと思っております。また、先日の第108回定時代議員会での所信表明と、いくつかの代議員諸氏からのきつい糾弾に対する毅然とした、理論の乱れや崩れない自信に満ちた答弁に接して、残された任期の１年を安心して任すことのできる会長であると確信できた。私共小樽市医師会会員である日本医師会副会長青柳俊先生も、この坪井会長のもとで思う存分活躍していただきたい。日本全国の日医会員の支持を得てなお一層の活躍を期待しております。

いささか感謝をのべまして、北海道医師会理事退任のご挨拶といたします。

北海道医師会飯塚会長以下、役員諸先生の今後のご活躍とご健康でありますことをご祈念いたします。

理事退任ご挨拶

前理事

金井　卓也

平成13年4月に理事に選出され、1期2年の短い期間でしたが、頑健だと思っていた身体に変調をきたし、全く健康に自信を失ってしまい理事を退任することに致しました。

ただ短い期間ではありましたが、この2年間は全く予期しない出来事の連続でありました。

9・11テロ、バイオテロ、対イラク戦争といった国際的な問題に加え、国内ではBSE問題、道内選出の国会議員の汚職、辞任問題等々。

そして診療報酬改訂、医療制度改革と次々に加えられる医療費抑制政策に私たちはまさに翻弄されっぱなしの2年だったと思います。

そのような悪環境にひるむことなく飯塚会長の提唱する医の倫理の高揚、情報の共有化を柱とした道医執行部の基本姿勢と国民皆保険制度の堅持といった毅然とした方針で、山積みする問題に対処している常任理事の先生方には心から敬意を表するものであります。各医師会での介護保険の解説のためほとんど家に帰れないという担当理事の柳内先生の話、スピード違反で捕まることを覚悟しながら会場まで何時間も車を走らせると言っておられた医療保険担当理事の三宅先生の話などを折々の懇親会で伺い、それぞれの常任理事の先生方のご苦労がよく分かり、改めて感謝したものであります。

北海道医師会と郡市医師会との関係は、始めは漠然と考えていたのですが、やはり郡市医師会の考え方を吸いあげて日本医師会にその声を反映させていくことであろうと思います。そういう意味でも今後はさらに緊密に相互の関係を作っていく必要があろうかと考えております。

短い2年間の間に親しくご指導いただいた北見医師会の白川久成先生の突然のご逝去という悲しい出来事もありましたが、各医師会長と親しくお話ができ、またいろいろな情報交換もでき、それらを地元医師会に伝えることができたことを何よりも感謝しております。

北海道医師会を退任してからは、少し充電期間をおいて、若い頃から関心のあった福祉にまた目を向けてみようと思っております。

北海道医師会の皆さまのご活躍とご健勝を心よりお祈り申し上げます。

理事退任ご挨拶

前理事

宮脇　寛海

道医師会理事を退任するにあたり、一言ご挨拶申し上げます。このすぐる2年間は、医療制度の度重なる改悪を経験し、私の零細な有床診療所も手痛いブローを受けました。私の税理士も「先生、大変だ！ひどい赤字です。なんとかしなきゃ、危ないですよ！」と言うのです。

収入激減により、人件費も払えません。リストラに次ぐリストラ。病床も閉鎖しました。気がついた時は手おくれと言う感じです。うかつにも安易に、惰眠をむさぼっていたのか？

いや、この数年間、危機を感じ、これからは介護の時代だと言えば、ケアマネの勉強をしたり、療養型病床群がよさそうだと聞けば、さっそく病室の手直しをしたり、とそれなりに、あたふたと右往左往の経営努力をしましたが、空振りばかり、ヒットは出ません。

盛んに猛反省しているのですが、結局、いきつく結論は一つ。医師会の政治力、集票能力であります。真理は常に簡単なのであります。今後とも政治から眼をはなさず、ネバーギブアップ！で医政活動をやって行きたいと思います。

「白秋」余情
―4年間の月日によせて―

前監事
井上　勇

優れた創造力と怯懦を許さぬ信念の人、と私が敬愛する飯塚会長のご新任と時を同じくして、役員の末席に自らが着くことになろうなどとは、全く予想外のことであった。

人生を四季に辿れば、疾く「玄冬」の時期にあったのかもしれない。

しかし、私には「白秋」いまだ余日を思わせる安らぎと、ほどほどの緊張感を保ちながら、恵まれた監事としての4年間ではあった。

それらの昔日は、顧みて長くともまた短くめぐり、1460余日を日々“今日を摘む”明け暮れととらえるとき、より熱く胸にせまる。

一日の評価を本当に理解するためには、夕暮を待つしかない―。詩人の指摘する「その日」が私に訪れて、すでに去った。

この3月、「後期高齢者」というロマンもなく夢もないネーミングの「資格」を私は手にした。

そしてそのことが私にとって、父母の眠る里と小樽と札幌の街が、いかに“掛け替えのない存在である”かを思い起こさせてくれる紛れもない機会となったのである。

実は、道医の会館の窓下にひろがる大通も、かつて私の下宿があった青春の庭であった。

友達の家に向かう道は近いと言う。そのような情感をリフレッシュするかのように、浅緑の木立ちを抜けて風が匂うときなど、古くて新しい街の移りが偲ばれて、小樽から通う道のりをどれほどに楽しく感じたことであろう。

“ふるさと”の原風景に色褪せる日は来ない。とはいえ、人の運命と共にある優しいリセプター（Receptor）の故に、時には翳ることもあるのだと思う。

去年の夏、私は故郷を訪ねていた。幼い日の思い出と現の狭間に揺れて、めくるめく郷愁のなかに佇んでいた。と、突然叫ぶような声に醒された。

「叔父さん。昨日まで生きていたんだょ。育てていたんだょ！…」、甥が田の面を見つめて涙ぐんでつっ立っていた。目の前に広がる青田刈りの現実に私は息を呑む思いであった。

「あぁ、何という無惨。農政の無策よ。いやいや医政もそっくりこの手口なのだ…」怒りに体が震えた。

そしていま、行けども戦えども勝鬨の聞かれぬ私たちの“たたかい”の無念や苛立ちを嘲笑うかのようにイラクで殺し合いが続いている。

キャッチボールの二人が[Remember」を「Forget」しようとにわかかに約束できるはずもない。始めから「戦争の悲惨」を知らず、生命の尊厳もグローバルな人間愛も持ち合わせていないのだ。

どうやら老害発作の予感がする。

いざ、お別れとしよう。

監事の定番・適法且つ適正に加えて、在役中に一度だけ嬉しく耳にした「健全」という言葉を会のために、また皆様がご健勝でこの厳しい改革の時代に耐え有為にクリアされますよう、心からご期待しご祈念申し上げたい。

関心（感心）･感動・感謝を人生の三冠となぞらえた人がいる。

黄昏る光のなかに邂逅の謝念があふれる。ご厚情に接した多くの方々に今一度お礼を申し上げる擱筆させていただこう。有り難う、そして、さようなら。

副議長退任にあたって

前副議長
河西　紀夫

一昨年春の代議員会において、やむ得ない事情により副議長に選出され、たった1期2年でありましたが、無事この責務を果せましたのは、道医の役員・代議員の諸先生のご協力と、官尾議長のご指導があったればこそと、心から感謝を申し上げる次第です。

副議長に選出されるまでは、代議員として、言いたいことを自由に質問、発言でき、代議員会もまた愉しいものだとの感覚で出席していました。

しかし、副議長になってみると、現在の厳しい医療情勢のなか、会員の代表である代議員の先生方に自由に発言させ、医師会活動を活性化させていかなければなりません。しかし、限られた時間の中で、円滑に議事をすすめなければならないジレンマに襲われました。発言・質問の時間がオーバーすると予鈴を鳴らしたり、代議員にはかなり嫌われたのではと思っています。

副議長在任中の一番の思い出は、昨年秋の代議員会での“野次事件”です。執行部の答弁中に代議員から“止めろ”という野次が飛び出しました。議長をしていた私としては、気付きながら無視したのですが、会議の終了時にこのことが問題となり、対処に苦慮しましたが、野次として処理でき、代議員会も無事終了し、ホッとしたことを今でも思い出します。

先日、日医の代議員会を傍聴したおりに、同様の野次が、多数飛び交うのを聴いて、道医においても、時にはあっても良いのではと思うようになりました。

しかし、質問・発言をする側も、答弁をする側も、時間を厳守し、発言内容を簡潔明瞭にすることが会議のルールであると考えます。

以上が、副議長退任にあたっての私の感想です。これからは、良い意味での野次、愉しい野次を期待したいと思っております。

レイアウトの関係上、順不同となっておりますことご了承ください。

お知らせ

PIAFS（PHS）専用アクセスポイントのご案内

―北海道医師会のインターネット接続サービス―

北海道医師会情報ネットワークサービスでは、本会会員にダイアルアップ接続による「インターネット接続サービス」を提供しておりますが、これまでご要望・お問い合わせを多数いただいておりました「PIAFS（PHS）専用アクセスポイント」の運用を、平成12年10月16日より開始いたしました。詳細は下記のとおりですので是非ご利用ください。

記

・アクセスポイント電話番号：011-208-9575
・PIAFS対応の機器（PHS等）で、64kbpsおよび32kbpsの通信が可能です。
・接続IDおよびパスワードは、現在お使いになられているものがそのまま使用可能です。
・ご不明の点がございましたら、北海道医師会事業第二課（Tel.011-231-1725）伊藤までご連絡ください。